

《 論 説 》

昭和初期の日本におけるバスケットボールの
速攻法について

谷釜 尋徳

1. はじめに

バスケットボールの母国アメリカで、最初に発生した攻撃戦術は「速攻法」(＝ファストブレイク)であったという⁽¹⁾。今日のバスケットボールにおいても、攻撃側がボール獲得後に原則として最初に試行すべきプレーは速攻法であると考えられている⁽²⁾。日本バスケットボール協会の見解によると、速攻法とは「攻撃と防御の切り換え時に生じる防御陣の一瞬のスキをつくことである。防御側が防御体制を整える前に攻撃をしかけるのである。」⁽³⁾と規定されるが、これは「攻撃を切り換えときのスピードは、敵の防御が依然として無編成のままであることを見込むことができるので、攻撃のチャンスを高めるものである。」⁽⁴⁾というボールゲームの攻撃の基本原則に則っている。

スポーツ運動学において「戦術」とは「行動の結果を考慮して、最も合目的に目的を達成する方法」⁽⁵⁾と説明されるが、ウドゥンによればバスケットボールにおいて速攻法を使用する「目的」は次の諸点に集約されるという。す

(1) 吉井四郎『バスケットボール指導全書 2』大修館書店、1987年、271頁。

(2) Smith, *Basketball multiple offense and defense*, Allyn and Bacon, 1981, p.84. シュテラー・コンツァック・デプラー著、唐木國彦監訳『ボールゲーム指導事典』大修館書店、1993年、197頁。ウットゥン著、水谷豊ほか訳『バスケットボール 勝利へのコーチング』大修館書店、1994年、103頁。日本バスケットボール協会編『バスケットボール指導教本』大修館書店、2002年、220頁。日本バスケットボール協会エンデバー委員会編『エンデバーのためのバスケットボールドリル 3』ベースボール・マガジン社、2005年、9～18頁。ハギンス著、三原学訳『ファストブレイク&セカンダリーオフェンス』ジャパンライム、2005年、3頁。

なわち「防御陣に対して数的優位を作る」「スコアリング・エリアでノーマークの選手を作る」「高確率のシュートを打つ」の3つである⁽⁶⁾。このように、速攻法を有効に使用することができれば、上記のごとき状況を意図的に作り出すことができ、より優位に攻撃を展開することができると解されよう。

こうした利点を持つ速攻法の理論は、すでに昭和初期頃には日本でも紹介されていたが、当時代の日本においてはその戦術が実際に使用されることは稀であった。昭和初期の日本には速攻法を有効に用いるために必要な諸要素が満たされていなかったがゆえに、当該戦術を採用することが難しかったと考える。

そこで本稿では、昭和初期頃の日本で説かれていた主要な速攻法の理論を紐解き、その戦術が実際にどの程度普及していたのかを確かめたくて、最後に速攻法の使用を妨げていた各種の要因を明らかにすることにしたい。

さて、日本におけるバスケットボールの技術・戦術史については、牧山⁽⁷⁾、吉井⁽⁸⁾、藤田⁽⁹⁾、二杉⁽¹⁰⁾、及川⁽¹¹⁾、谷釜⁽¹²⁾などの研究において触れられている。しかし、上記の諸研究は主に基礎技術を中心として取り上げたものであつ

(3) 日本バスケットボール協会編『バスケットボール指導教本』大修館書店、2002年、220頁。

類似の見解として、稲垣による「速攻とは、味方がボールを保持した瞬間、その地点から相手方が帰陣する前に相手方との対峙を打破しながらボールを得点地域へとすすめ得点を追求することである。」(稲垣安二「バスケットボールにおける攻撃の概念、方法に関する一試論」『日本体育大学紀要』16巻2号、1987年3月、80頁)との概念規定がある。また、吉井は「速攻法」を「ファスト・ブレイク」「クイック・ブレイク」「クイック・トランジション(アーリー・オフense)」「『ボールとばし』のフリーランス」の4つの段階に分け、そのうちの「ファスト・ブレイク」を「ボールを速く進めることによって得られるかもしれない『人数上の利益』(アウトナンバーする、または少人数の攻防を展開する)を求めての速攻法。」と定義している(吉井四郎『バスケットボール指導全書2』大修館書店、1987年、58頁)。

(4) デーブラー著、稲垣安二監訳『球技運動学』不味堂出版、1985年、269頁。

(5) 金子明友・朝岡正雄編著『運動学講義』大修館書店、1990年、275頁。

(6) Wooden, *Practical modern basketball*, Ronald Press Company, 1966, p.142.

(7) 牧山圭秀「バスケットボールの技術史」『スポーツの技術史』大修館書店、1972年、374～400頁。

(8) 吉井四郎『バスケットボールのコーチング基礎技術編一』大修館書店、1977年、19～21頁。同『バスケットボール指導全書2』大修館書店、1987年、137～147頁。

(9) 藤田修一「バスケットボールの基礎技術の歴史的考察」『新潟大学教育学部高田分校研究紀要』1980年3月、125～135頁。

て、かつての日本で使用されていた戦術を詳細に分析する内容ではなかった。その中であって、牧山は戦前と戦後という大枠の時期区分に基づいて日本の戦術史を概観しているものの、速攻法については立ち入って論じていない。

このように、日本におけるバスケットボールの速攻法にまつわる歴史的研究は未だ手付かずの状態にあるといわねばならない⁽¹³⁾。ここに、本稿の独自性を認め得るものである。

2. 昭和初期の主要な速攻法の検討

日本にバスケットボールが伝わった時期については諸説あるが、明治41(1908)年に国際YMCAトレーニングスクールで学んだ大森兵蔵が東京YMCAにこのスポーツを持ち帰っている⁽¹⁴⁾。その後、大正3(1914)年にア

(10) 二杉茂「バスケットボールにおけるワンハンドショットの社会史的研究」『神戸学院大学人文学部紀要』23号、2003年3月、103～129頁。同『ワンハンドショットのメッセンジャーたち』晃洋書房、2009年。

(11) 及川佑介「初期バスケットボール競技におけるドリブル技術の防衛性と攻撃性」『国士館大学体育・スポーツ科学研究』5号、2005年3月、13～23頁。

(12) 谷釜尋徳「日本におけるバスケットボールの専用球の改良とそれに伴うドリブル技術の発達に関する技術史的考察」『スポーツ運動学研究』21号、2008年11月、45～59頁。同「大正期～昭和前半期の日本におけるバスケットボールのシュート技術の変遷」『体育学研究』55巻1号、2010年6月、1～16頁。

(13) 一方、アメリカのバスケットボールに関する技術・戦術史研究は、主に下記の諸研究(外国語文献に限る)において試みられている。

Bee, *Winning basketball plays*, A.S.Barnes and Company, 1950. Cooper and Siedentop, *The theory and science of basketball*, Lea & Febiger, 1969. Knudson, *The evolution of men's amateur basketball rules and the effect upon the game*, Spring field college, 1972. Isaacs, *All the moves: A history of college basketball*, Lippincott, 1975. Webster, *Basketball's amoeba defense*, Parker Publishing Company, 1984. Bjarkman, *Hoopla: A century of college basketball*, Masters Press, 1996. Bjarkman, *The biographical history of basketball*, Masters Press, 2000.

(14) 日本体育協会編『日本スポーツ百年』日本体育協会、1970年、338頁。日本バスケットボール協会編『バスケットボールの歩み—日本バスケットボール協会50年史—』日本バスケットボール協会、1981年、42頁。全日本大学バスケットボール連盟編『60年のあゆみ』全日本大学バスケットボール連盟、2009年、40頁。

メロカから YMCA の指導者として派遣された F.H. ブラウンが、再びバスケットボールを紹介したことが日本における普及の端緒となった。

それでは、本稿が着目する速攻法は日本ではいつ頃から認知されはじめた攻撃戦術だったのであろうか。日本で本格的なバスケットボールの指導書が世に送り出されるようになったのは大正末期頃であったが、当時刊行された文献には藤山快隆の『バスケットボール』⁽¹⁵⁾(1924)、三橋義雄の『バスケットボール』⁽¹⁶⁾(1926)、薬師寺尊正の『アルス運動大講座』⁽¹⁷⁾(1927)、鈴木重武の『籠球コーチ』⁽¹⁸⁾(1928) などがある。しかし、そこには速攻法に関する詳しい解説はみられない。

おそらく、日本でバスケットボールの速攻法の詳細が紹介されはじめた時期は昭和 4 (1929) 年頃であったと推察される。同年刊行の『籠球競技法』において安川伊三が速攻法を詳述し、翌年には李想白が『指導籠球の理論と實際』(1930) を上梓して、安川と同様の速攻法の理論を説いているからである。その後も、佐々木等⁽¹⁹⁾、松本幸雄⁽²⁰⁾、宮田覚造⁽²¹⁾ によって速攻法の理論が紹介されている。

上記の文献において解説された主要な速攻法は「長距離送球法」と「三路攻撃法」の 2 種類に大別することができる。そこで以下では、これら 2 種類の速攻法の内容と特徴に関して検討を加えることにしたい。なお、以下本稿で使用するコート内の名称は、昭和初期頃のコート上に仮想線(点線)を引いて作成した図 1 に基づいている。

2-1 長距離送球法の検討

当時、この種の速攻法は「長距離送球攻撃法式」⁽²²⁾「長距離送球速攻式攻撃

(15) 藤山快隆『バスケットボール』目黒書店、1924年。

(16) 三橋義雄『バスケットボール』廣文堂、1926年。

(17) 薬師寺尊正「バスケットボール」『アルス運動大講座 第五巻』アルス、1927年、52～64頁。

(18) 鈴木重武『籠球コーチ』矢来書房、1928年。

(19) 佐々木等「籠球の指導(四)」『體育研究』1巻5号、1934年3月、112～117頁。

(20) ロンボーグ著、松本幸雄訳「速攻法のポシビリティ」『籠球研究』2号、1934年12月、1～2頁。

(21) 宮田覚造・折本寅太郎『籠球競技の指導』日本体育学会、1935年、269～275頁。

法」⁽²³⁾「ハンガーシステム」⁽²⁴⁾「長距離送球攻撃法」⁽²⁵⁾「ハンギング・システム」⁽²⁶⁾などと様々に称されていたが、以下では「長距離送球法」に統一して表記するものである。

① 長距離送球法の内容

ここで検討する長距離送球法はいわゆるロングパス・ファストブレイクのこと、バスケットボール史上最初の速攻法の系譜に属するものである⁽²⁷⁾。

具体的な戦術の展開は図2に示した通りである。すなわち、⑤はリバウンドボールを獲得するやいなやフロントコートに常駐している③にロングパスを送る。③はエンドライン付近からフリースローライン周辺までフラッシュして⑤からのパスを受ける。②はコートの右サイドレーンを、①は左サイドレーンを走り、ゴール前で数的優位を作り出すべく努める。④はその後方からミドルレーンを走る。パスを受けた③はまずゴール方向にターンして、自らシュートをするのか、サイドレーンを走る①か②にパスを出すのか、もしくは後方からミドルレーンを走ってくる④にパスを出すのかを選択する。なお、リ

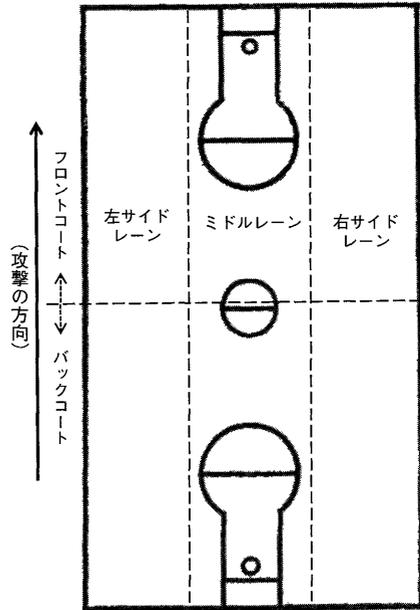


図1 本稿におけるコート内の名称

(22) 安川伊三『籠球競技法』目黒書店、1929年、176頁。

(23) 李想白『指導籠球の理論と実際』春陽堂、1930年、469頁。

(24) 李想白『籠球界を顧みて』『昭和七年運動年鑑』朝日新聞社、1932年、238頁。

(25) 佐々木等『籠球の指導(四)』『體育研究』1巻5号、1934年3月、112頁。

(26) 宮田覚造・折本寅太郎『籠球競技の指導』日本体育学会、1935年、271頁。

(27) 大川信行「バスケットボールにおけるロングパス・ファストブレイクの変遷について」『北陸体育学会紀要』41号、2005年3月、57頁。同「バスケットボールのファストブレイク誕生までの経緯」『体育史研究』23号、2006年3月、63頁。

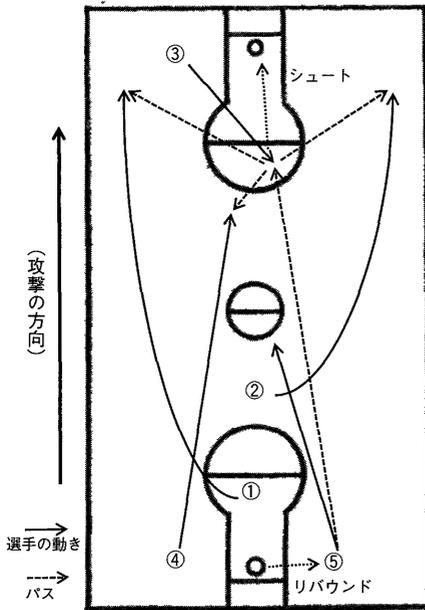


図 2 長距離送球法の展開

バウンドボールを④が獲得した場合は、上記とは逆のパターンで同様の攻撃を展開する。

この速攻法（＝長距離送球法）には 2 段階の攻撃が備えられていたと見なすことができる。第 1 段階（1 次速攻＝プライマリー・ブレイク）ではロングパスを受けた③とサイドレーンを走る①②によって 3 対 2（攻撃の人数対防御の人数、以下同様）ないしは 2 対 1 の状態で攻撃が仕掛けられるが、これで攻めきれなかった場合には第 2 段階（2 次速攻＝セカンダリー・ブレイク）⁽²⁸⁾としてミドルレーンを走るト

レーラー④を加えて、さらなる数的優位を意図的に作り出す工夫があったと理解できるからである。

② 長距離送球法の特徴

次に、長距離送球法の特徴を明らかにしておきたい。その最大の特徴は、1 人の選手をフロントコート側のゴール付近に常駐させ、攻撃に専念させている点にある。これによって、リバウンドボールを獲得した地点からフロントコートのフリースローライン辺りまで 1 本のロングパスによってボールが移動するため、例えば「此の方法は防禦より、直ちに攻撃に轉じた、最も急速な攻撃

(28) 「ファーストブレイクの最初の攻撃で攻めきれなかったときに、後続のプレーヤー（トレーラーなどに展開する攻撃のことをセカンダリーブレイク（二次速攻）という。このセカンダリーブレイクに対して最初の攻撃をプライマリーブレイク（一次速攻）という。」（クロウゼ編、水谷豊ほか訳『バスケットボール・コーチング・バイブル』大修館書店、1997 年、326 頁）

法である。』⁽²⁹⁾などと記されたように、速度の面で最も優れた攻撃戦術であると考えられていた。

相手のゴール前で数的優位を作り出すためには、⑤から③へのロングパスが通った時点で左右のサイドレーンを走る選手が攻撃に参加できる状態になっていなければならない。そのための工夫は、李の次の記述から窺うことができる⁽³⁰⁾。

「後板（バックボード—引用者注）よりの球を確かに取るといふ信頼の念が他の選手の頭になれば、チームの一部即ち速攻すべき前線が敵手の投射を見て直ちに攻撃に移る用意を整へる譯には行かぬ。そして此速い動作がなければ有効な速攻法は實際上企てられないのである。」（下線、引用者）

李の見解（下線部）によれば、長距離送球法を成功させるためにはリバウンドボールを確実に獲得することが前提となるが、相手がシュートを打った時点で少なくともサイドレーンを走る①と②は前方に走り出す必要があったことがわかる。ゆえに、リバウンドボールを獲得する作業は原則として④と⑤のみに任されていた。そのため、仮にリバウンドボールを相手選手に奪われた場合や、リバウンド後のロングパスを遮断された場合には、逆に数的優位をつかれて容易に得点を許してしまう可能性があったといわねばならない。李がこの速攻法の欠点を「失敗逆襲される危険を藏してゐる」⁽³¹⁾と指摘する所以である。

この他にも、長距離送球法には明確な欠点があった。宮田らが「四人で防禦

(29) 佐々木等「籠球の指導（四）」『體育研究』1巻5号、1934年3月、641頁。

(30) 李想白『指導籠球の理論と實際』春陽堂、1930年、485～486頁。

(31) 李想白『指導籠球の理論と實際』春陽堂、1930年、486頁。

このことについては、佐々木等も次のように同様の見解を提示している。「速攻法は、ロングパスによることが多いのであるが、之は、屢々失敗に終ることもあるものであるといふことを考へなければならない。従つて、却つて相手に乗せられるといふ恐があるものであるから、相手の防備が出来て居る様な場合には何時でも之を中止し得る準備と技術とを有たなければならない。」（佐々木等『學校球技』目黒書店、1937年、220頁）

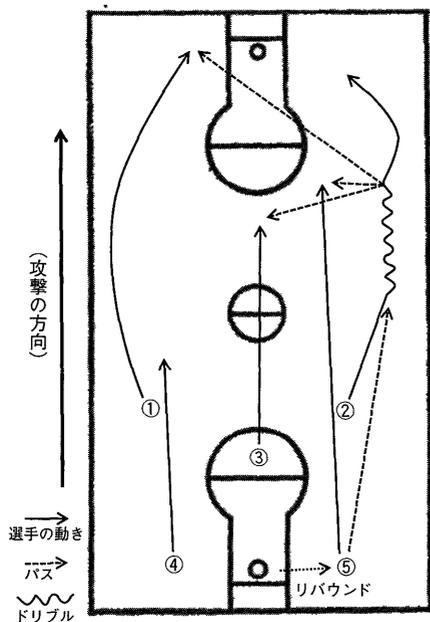


図3 三路攻撃法の展開

して一人を攻撃地域に残しておくものである。此の方法は攻撃の點よりすれば極めて有利であるが、防御が薄弱になるから採用する場合には一考を要する。』⁽³²⁾と説明しているように、フロントコートに1人を常駐させておくことは4人で防禦することを意味していた。当該の欠点は、昭和8(1933)年に来日したガードナーがこの戦術を指して「これは四人で防いで一人を攻撃地域に残しておくものであるが、此の方法は均衡があまりよく取れないから勧められません。』⁽³³⁾と指摘していることから確かめられよう。

2-2 三路攻撃法

次に検討するのは、今日のスリーメン・ファストブレイクの先駆けとなった速攻法である。この戦術は「三路攻撃法」⁽³⁴⁾「三路攻撃法式」⁽³⁵⁾「直攻法」⁽³⁶⁾などと呼ばれていたが、以下では「三路攻撃法」に統一して表記する。

① 三路攻撃法の内容

図3に示されているように、リバウンドボールを獲得した⑤は②にアウトレットパス⁽³⁷⁾を出す。パスを受けた②は防御側の選手が接近してくるまで右サイドドレーンをドリブルで進む。同時に、③はミドルドレーンを①は左サイドドレー

(32) 宮田覚造・折本寅太郎『籠球競技の指導』日本体育学会、1935年、271頁。

(33) 大日本バスケットボール協会編『ガードナー籠球講習要録』動文社、1933年、63～64頁。

(34) 安川伊三『籠球競技法』日黒書店、1929年、184頁。

(35) 佐々木等『籠球の指導(四)』『體育研究』1巻5号、1934年3月、113頁。

(36) 宮田覚造・折本寅太郎『籠球競技の指導』日本体育学会、1935年、270頁。

(337)

ンを走る。②はフリースローラインの延長線上付近でストップし、自らシュートをするのか、①か③にパスを出すのかを選択する。攻めきれない場合には後方から走ってくるトレーラー⑤にパスを出すこともできる。なお、リバウンドボールを④が獲得した場合は、上記と逆のパターンをもって同様の攻撃を展開する。

この三路攻撃法も前述の長距離送球法と同様にして、数的優位を作り出すために2段階の攻撃が備えられていたことが窺える。まずは3つのレーン(左右のサイドレーンとミドルレーン)を利用して3人で攻撃を仕掛け、次なる攻撃としてトレーラーにパスを出すという展開が想定されているからである。

速攻法の成功の可否は、攻撃側が防御側よりも多人数で攻撃を仕掛けられるか否か、すなわち数的優位を作り出せるか否かにかかっているとされるが⁽³⁸⁾、当時の日本で説かれていた2つの主要な速攻法は、いずれもそのための工夫が施されていたといえよう。

② 三路攻撃法の特徴

ここで、三路攻撃法の特徴を長距離送球法と比較しながら明らかにしておきたい。このことについて安川は「異なる所は、センター(図3中の③—引用者注)が、コート上の攻撃区域に留まつてゐないで、寧ろ球を進行させるために大いに働くこと云ふ点である。」⁽³⁹⁾と述べ、両者の大きな相違点としてフロントコートに予め選手が常駐せずに、その選手(③)がボール運びに参加する点をあげている。ゆえに、三路攻撃法を採用することによって5人で防御することが可能になったため、この速攻法は先の長距離送球法の欠点のある程度解消し得

(37) アウトレットパスとは「リバウンドを取ってから最初に出されるパスであり、速攻を組織する上で最も大切なプレーになる。」(クロウゼほか著、三原学ほか訳『バスケットボール・オフense』社会評論社、2010年、76頁)と説明されるものである。また、ウドゥンは「多くの場合、速攻法の成否はリバウンダーが素早いアウトレットパスを出せるかどうかによって決まる。」(Wooden, *Practical modern basketball*, Ronald Press Company, 1966, p.214)と言及している。

(38) Winter, *The triple-post offense*, Prentice Hall, 1962, p.57.

(39) 安川伊三『籠球競技法』目黒書店、1929年、185頁。

る戦術であったと見なされよう。

しかし、三路攻撃法には欠点もあった。佐々木がこの速攻法を指して「長距離送球の攻撃よりも稍や遅い攻撃法なることは、ドリブルの行はれるだけでもわかる。」⁽⁴⁰⁾と説いているように、相手のゴール付近まで 1 回のパスでボールを運ぶ長距離送球法と比べて、三路攻撃法は少なくとも 1 回のパスとドリブルによって展開されるものであったため、ボール運びの速度の面では劣っていたといわねばならない。

また、稲垣によれば、スリーメン・ファストブレイク（＝三路攻撃法）は概ねリバウンド、アウトレットパス、ボール運び、スコアリングプレーの 4 つの局面に区分されるが⁽⁴¹⁾、長距離送球法はリバウンド獲得後の 1 回のロングパスが「アウトレットパス」と「ボール運び」の役割を兼ねており、パスが通れば直ちに「スコアリングプレー」に移行することが可能となる。三路攻撃法との速度の違いは、ここに起因しているといえよう。

3. 昭和初期の速攻法の使用頻度と速攻法の使用を妨げた諸要因の検討

3-1 昭和初期の速攻法の使用頻度

以上、昭和初期の日本で紹介されていた主要な速攻法として、長距離送球法と三路攻撃法の内容及び特徴について検討を加えた。それでは、これらの速攻法は当時、実際のゲームにおいてどの程度用いられていたのでしょうか。

このことについて李は、昭和 5（1930）年 1 月発行の雑誌『運動界』において「去年のリーグ・ゲームでは、否凡ての大學チームのゲームを通して、速攻法は極僅の例外を除いては見る事が出来なかつた。」⁽⁴²⁾と回顧している。李が振り返る「去年」とは昭和 4（1929）年のことであるが、その年は安川が

(40) 佐々木等「籠球の指導（四）」『體育研究』1 巻 5 号、1934 年 3 月、113 頁。

(41) 稲垣安二「バスケットボールにおける速攻の体系化に関する研究」『日本体育大学紀要』18 巻 2 号、1989 年 3 月、56 頁。

(42) 李想白「近時籠球戦策餘談（其の一）」『運動界』11 巻 1 号、1930 年 1 月、98 頁。

『籠球競技法』を上梓して速攻法を紹介しているものの、これが広く認知されていなかったことは容易に想定される。

事実、竹内虎士は大正末期から昭和5(1930)年の期間における大学の試合が、総じてロースコアの傾向にあった原因を次のように分析している⁽⁴³⁾。

「主なる原因はショットにまでの機會の少き事即ち、戰術に歸せねばならないと思ふ。尚詳しくはその頃の戰術の一般的傾向をなしてみた遲滯法による、セットオフエンスの影響が最も大なるものでなければならない。バックコートに於て球を得た時には、必ずセットに組みテンポを一段下げて攻撃に移り、對手も容易にチャージはしない所から、緩く球を廻し、得點可能、確實に非ざればショットしない傾向がかかる結果を生ぜしめたものと見る。」

上記引用によれば、当時の攻撃戰術はオールコートでのスピーディな展開を志向する「速攻法」ではなく、ボール獲得後は5人揃った状態でゆっくりとパスを回しながらハーフコートでスローテンポな攻撃を展開する「遅攻法」が全盛であったとみえる。この傾向がはからずもロースコアのゲーム展開を生み出していたのである。

次に、雑誌『體育と競技』の昭和9(1934)年11月号に掲載された宮崎正雄の論考より、速攻法について記述された部分を引いておこう⁽⁴⁴⁾。

「速攻撃に見るべきものが僅めて少いことで、甚しいのは速攻撃の意志が全くないではないかと疑はれるものさへあつた。(中略)唯面白い面白くない等の問題でなくて勝利といふ最後の目的を達するためにも速攻撃は重大な影響を及ぼす。勿論チャンスのない時でも常に速攻撃を試みよと云ふのではない。爲すべきチャンスを餘りにも無爲に過すことを惜むのみであ

(43) 竹内虎士「籠球に於けるシステムプレイの考察」『體育と競技』14巻6号、1935年6月、33頁。

(44) 宮崎正雄「籠球雑感」『體育と競技』13巻11号、1934年11月、74頁。

る。』

このように、宮崎は昭和 9（1934）年に至っても日本では速攻法がほとんど用いられていなかったことを伝えている。また、宮崎が同誌の翌月号に「現在行はれて居るゲームでは、如何なる攻撃法によつて最も多く得点が得られて居るかと云へば勿論遅攻法によつてである。事實攻撃と云へば遅攻法のことであるかの如き観を呈して居る。」⁽⁴⁵⁾と記しているように、前述した遅攻法の全盛期はこの時期においても依然として続いていたといえよう。

これとほぼ時期を同じくして刊行された『籠球競技の指導』には「攻撃の最も理想的な方法は（中略）敵手の防禦陣の整はない内に一気に之を攻め落としてしまふ事である。之を特に速攻法と稱する」⁽⁴⁶⁾と明記されている。このことから察するに、昭和初期の日本では速攻法の利点が十分に認識されていながらも、この戦術を実際の試合では頻繁に使用できない何らかの事情があったと考えるのが自然であろう。

3-2 速攻法の使用を妨げた諸要因

昭和初期の日本において、速攻法が盛んに用いられなかった理由はどのような点に求めることができるのであろうか。以下で検討していきたい。

① 技術的な問題

独自の「球技戦術論」を世に問うたシューテラーらが、ボールゲームの競技力の前提条件を論じる中で「ボールゲームにおける技術と戦術は、（中略）互いに独立した二つの要因として競技力構造に組み込まれているのではなく、統一した技術的・戦術的競技力要因として一体化しているのである。」⁽⁴⁷⁾と言及するように、スポーツの戦術と基礎技術は無視し得ない間柄にある。この点については、いわゆる「技術トレーニング」研究の立場からグロッサーらが「戦術

(45) 宮崎正雄「籠球指導」『體育と競技』13巻12号、1934年12月、174頁。

(46) 宮田覚造・折本寅太郎『籠球競技の指導』日本体育学会、1935年、269頁。

(47) シューテラーほか著、唐木國彦ほか訳『ボールゲーム指導事典』大修館書店、1933年、36頁。

行動はつねに技術のレベルや体力のレベルと緊密に結びついている。』⁽⁴⁸⁾と指摘し、ドイツスポーツ連盟コーチアカデミーのテキストにおいてヤーンも「技術は、それが唯一ではないとしても、戦術の重要な基礎となっている。』⁽⁴⁹⁾と記述していることから知る事ができよう。

これをバスケットボールの速攻法に当てはめてみると、吉井が「速攻法を成功的に指導するためには、速攻法で使用される『基礎技術』の正しい指導と、習得された優れた技術を、実際のゲームに発揮することの裏付けの力となるプレイヤーの、心身の正しい『コンディショニング』が必要である。』⁽⁵⁰⁾と説いていることに気がつく。そこで、バスケットボールの速攻法を研究対象とする本稿では、当該戦術の構成要素の1つである基礎技術に着目し、以下において検討するものである⁽⁵¹⁾。

こうした視点から、まずは昭和初期の速攻法に必要とされた基礎技術を確認しておこう。昭和初期において速攻法を紹介した文献を通覧してみると、当該戦術に必要とされた基礎技術は概ね、ボールを獲得するためのリバウンド技術、ボール運びのためのパス技術やドリブル技術、詰めの段階でのシュート技術などに集約される⁽⁵²⁾。

上記の基礎技術のうち、速攻法の使用を妨げた要因として本稿が注目するの

(48) グロッサー・ノイマイア著、朝岡正雄ほか訳『選手とコーチのためのスポーツ技術のトレーニング』大修館書店、1995年、9頁。

(49) ヤーン著、朝岡正雄ほか訳『スポーツの戦術入門』大修館書店、1998年、67頁。

(50) 吉井四郎『バスケットボール指導全書2』大修館書店、1987年、930頁。

類似の見解として「バスケットボールのすべてのオフenseは、ファンダメンタルのできれば左右されます。」(ナイト・ニューエル著、笠原成元監訳『ウイニング・バスケットボール』大修館書店、1992年、109頁)とするものがある。

(51) 本稿が意図するところの「技術」とは、岸野の次の見解によっている。岸野は「正しく目的にむかって経済的に動く経過において、運動は技術と関連してくる。」という理解のもと「運動とは、運動経過のことであり、運動技術とは、客観的な『運動経過の合目的形態』である」との見解を示している(岸野雄三「スポーツの技術史序説」『スポーツの技術史』大修館書店、1972年、14頁)。また、吉井はバスケットボールの「基礎技術」を「これ以上は分析することができない最後に残った技術、換言すれば、最も簡単な最低次元の技術」(吉井四郎「体育における『基礎』『基本』教材を洗い直すバスケットボール」『体育科教育』30巻3号、1982年3月、49頁)と定義している。

はドリブル技術である。昭和初期のドリブル技術を知るべく当時代におけるバスケットボールの指導書を紐解いてみると、多くの指導者が視線を前方に向けていることを理想としながらも、それと同時にボールを視野に収めておくよう勧めるというドリブル論を唱えていたことが判明する⁽⁵³⁾。これには理由があった。

日本において大正末期～昭和初期頃に製造されていた国産ボールは、手縫い製法であったこと等から完全な球体ではなく、しかも使用中に変形するという欠点を持っていたため、ボールがバウンドする際の入射角と反射角が必ずしも等しくなるとは限らなかった。予想外の方向にボールがはね返る（＝イレギュラー）ことも珍しくはなかったのである。それゆえに、昭和初期のドリブル技術はファンブルなどのミスを予防すべく、常にボールを視野に入れて体の正面でのみ行われていたのである⁽⁵⁴⁾。

こうしたドリブル技術は、長距離送球法の場合ならともかく三路攻撃法を仕掛ける際に大きな弊害になっていたと推察される。先にみたように、三路攻撃法はアウトレットパスを受けた選手がサイドライン沿いをドリブルすることによってボールを運び、ゴール付近に走り込んでくる選手にパスを出して得点するパターンが想定されていた。しかし、足もとのボールばかりに気を取られて前方に視野を広げることができないドリブル技術では、フロントコートまでボールを運ぶことができたとしても、フリーの味方を見つけ出して正確なパスを出すことは難しかったといわねばならない。

(52) 安川伊三『籠球競技法』目黒書店、1929年、176頁・185頁。李想白『指導籠球の理論と実際』春陽堂、1930年、469～470頁。宮田覚造・折本寅太郎『籠球競技の指導』日本体育学会、1935年、273～275頁。佐々木等「籠球の指導（四）」『體育研究』1巻5号、1934年3月、112～113頁。

(53) 安川伊三『籠球競技法』目黒書店、1929年、99～100頁。李想白『指導籠球の理論と実際』春陽堂、1930年、280頁。宮田覚造・折本寅太郎『籠球競技の指導』日本體育學會、1935年、140頁。

ちなみに、今日のドリブル技術における視線の取り方を日本バスケットボール協会編集の『バスケットボール指導教本』によってみていくと、そのポイントとして「ボールを見ないでヘッドアップを心がける。」（日本バスケットボール協会編『バスケットボール指導教本』大修館書店、2002年、80頁）という点が要求されていることがわかる。

(54) 谷釜尋徳「日本におけるバスケットボールの専用球の改良とそれに伴うドリブル技術の発達に関する技術史的考察」『スポーツ運動学研究』21号、2008年11月、45～59頁。

こうした状況を暗に指摘しているのが、雑誌『體育と競技』の昭和9 (1934)年11月号で宮崎正雄が記した次の引用文である⁽⁵⁵⁾。

「ドリブルは使ひ過ぎる程使つて居るが、然もそれが殆ど成功して居ない。一番多い失敗はドリブルを停止した後の處置が適當でなく、そのため相手にボールを奪はれたり、ヘルドボールにして仕舞つて折角のチャンスを無にしたことである。これはドリブルする者の殆ど全部がボールのみに着目して全局に眼を注がぬからで、従つて何處に味方の相手が居て何處に敵が居るか分らない。唯追はれるまゝに追はれて最後に窮してやむなく停止をする、そしてそれからボール捌かうとする。」

このように、昭和初期の日本においてドリブル技術は多くの選手によって用いられていたと見えるが、ドリブル中の視野が「ボールのみ」に注がれていたためコート上の状況を把握することができず、ドリブル停止後に失敗が相次いでいたというのである。

以上、ドリブル技術だけを取ってみても、当時の日本人には速攻法を成立させ得る基礎技術が備わっていなかったため、そのことが速攻法の使用を妨げる1つの要因となっていたと考えてよからう。

② ルール上の問題

笈田らによれば「バスケットボールのルールの変遷と、技術や戦術の發達はお互いに関連性が深く密接に結びついており、両者が表裏一体の関係にある」⁽⁵⁶⁾という。この点は、佐々木が昭和9 (1934)年3月発行の雑誌『體育研究』の中で「籠球に於ける攻撃法式も規則の改正、籠球技の進歩によつて變化を來たすのが當然である。」⁽⁵⁷⁾と言及しているように、昭和初期の日本におい

(55) 宮崎正雄「籠球雜感」『體育と競技』13巻11号、1934年11月、74頁。

(56) 笈田欣治・水谷豊・藤木大三「アメリカ・バスケットボールの技術發達史」『関西大学文学論集』40巻4号、1991年3月、124頁。

でも考慮されていた。

こうした視点から、昭和初期において速攻法の使用を妨げていたルール上の要因を探るべく、昭和 4（1929）年度のバスケットボールの競技規則を紐解いてみよう。すると、注目すべきルールとして「次の場合ボールはデッドにしてレフエリーの指圖する方法により再びボールがインプレーとせらるゝ迄は競技は停止せらるゝものとす。一、得點が爲されたる時。二、…」⁽⁵⁸⁾という一文が確かめられ、後段において「次の場合ボールはセンターサークルに於いてインプレーとせらるゝものとす。（中略）二、各ゴールの後。三、…」⁽⁵⁹⁾と記述されている。当時、シュート成功後は一旦プレーを中断し、センターサークル内でのトスアップをもって再開していたことがわかる。

このルールは昭和 10（1935）年まで継続して用いられていたため、必然的にスローテンポなゲーム展開が生み出されていたという⁽⁶⁰⁾。また、相手のシュート成功後に速攻法を仕掛ける機会を持ち得なかったことは、当該戦術を使用する機会が現行のバスケットボールよりも少なかったことを意味しているのである⁽⁶¹⁾。

(57) 佐々木等「籠球の指導（四）」『體育研究』1 卷 5 号、1934 年 3 月、640 頁。

(58) 朝日新聞社編『最新各種競技規則 昭和四年運動年鑑附録』朝日新聞社、1929 年、108 頁。

(59) 朝日新聞社編『最新各種競技規則 昭和四年運動年鑑附録』朝日新聞社、1929 年、110 頁。

(60) 牧山圭秀「バスケットボールの技術史」『スポーツの技術史』大修館書店、1972 年、382～383 頁。

(61) 昭和 11（1936）年に得点後のセンタージャンプが廃止されたことによって、徐々にゲームのスピード化が図られていった（香中亮一「ルールの変遷」『RDR60—早稲田大学バスケットボール部 60 年史—』早稲田大学 RDR 倶楽部、1983 年、254～255 頁）。すると、数年後には攻撃戦術にも新たな傾向がみられるようになる。妹尾堅吉が昭和 15（1940）年 12 月発行の雑誌『體育と競技』において「戦法に於ては近來の傾向として遅攻法に代はつて、速攻法全盛になつてきた」（妹尾堅吉「籠球競技概評」『體育と競技』19 卷 12 号、1940 年 12 月、27 頁）と語っているように、この時期には速攻法は多くのチームに主たる攻撃戦術として採用されるに至っているからである。また、速攻法は「地域防禦（ゾーンディフェンス）の攻撃法は速攻法（ファストブリーク）を最良の方法とされて居る。」（佐々木等「籠球」『競技運動各論 下巻』建文館、1937 年、35 頁）と言及されるような価値を認められるようになっていた。

③ 競技空間の問題

速攻法の使用を妨げた要因として次に検討するのは、競技空間 (=コート) の問題である。岸野が「運動施設・用具史は、(中略) 身体運動の側面から人間の問題としてアプローチしていなければならぬ。」⁽⁶²⁾と説くように、バスケットボールのコートはそこでプレーする選手の技術・戦術の実際と深く関わってきたと考えるからである。このことは、ゲナーによる「運動が行われる場所(環境)がスポーツの運動経過に大きな影響を及ぼしている」⁽⁶³⁾との指摘とも符合している。

大正14(1925)年刊行の『運動競技全書』の中で、野口源三郎は「是(バスケットボール—引用者注)は元來は屋内に於て行ふものであつたが、日本にはさう云ふ設備が少いので、多く屋外に於て行はれて居る。」⁽⁶⁴⁾と述べている。また、昭和3(1928)年5月発行の雑誌『運動界』において、李は「日本には未だ正規のコートが、少なくとも大學程度のチームが競技するに足る程のコートが一つもない状態である」⁽⁶⁵⁾と記述し、『指導籠球の理論と實際』(1930)でも同様の見解を提示している⁽⁶⁶⁾。このように、日本におけるバスケットボールは体育館不足に起因して、当初は「屋外」競技として受容されたことが窺えよう⁽⁶⁷⁾。屋外のコートでプレーすることは「風の強い場合には途中でボールの方向が變る。」「光線の関係によつて吾々の眼に映ずる遠近の差に變化がある。」などの弊害を生み出すと考えられていた⁽⁶⁸⁾。

しかしそれよりも、速攻法の使用を妨げていた主たる要因はコートの狭さにあったのではなからうか。昭和初期において東京近辺で頻繁にバスケットボー

(62) 岸野雄三『体育史』大修館書店、1972年、70頁。

(63) ゲナー著、佐野淳ほか訳『スポーツ運動学入門』不昧堂出版、2003年、73頁。

(64) 野口源三郎「運動場の設計と其管理維持方法」『運動競技全書』朝日新聞社、1925年、66頁。

(65) 李想白「バスケットボール旅行を終へて」『運動界』9巻5号、1928年5月、18頁。

(66) 李想白『指導籠球の理論と實際』春陽堂、1930年、39頁。

(67) このことに関する詳細は拙稿を参照されたい(谷釜尋徳「日本におけるバスケットボールの競技場に関する史的考察」『スポーツ健康科学紀要』(東洋大学)6号、2009年3月、21～38頁)。

(68) 小瀬峰洋『籠球競技』教文書院、1929年、151頁。

ルの公式戦会場となっていたのは東京 YMCA や明治大学であったが、当時の回顧録によれば、いずれの体育館もバスケットボールを実施するための十分な広さが確保されていなかったことが明らかである⁽⁶⁹⁾。

こうしたコート事情と速攻法との関係について、李は昭和 7（1932）年の『運動年鑑』の中で次のように指摘している⁽⁷⁰⁾。

「速攻に就ては現在コートが狭くこの技術の展開に未だ十分の餘地あることが惜しまれ、これほど速攻を一般が重視しながら殊に今のやうな狭いコートでありながらハンガーシステム（長距離送球法—引用者注）を試みるもの、一つも見當らぬ…」

上記引用によれば、日本における速攻法の提唱者の 1 人であった李は、速攻法とりわけ長距離送球法が浸透しない要因をコートの狭さに求めていたことがわかる。冒頭で述べたように、速攻法は「防御側が防御体制を整える前に攻撃をしかける」⁽⁷¹⁾との考え方に基づく戦術であるが、狭いコートでは防御側が容易に帰陣できてしまうため、例えばロングパスが通ってもゴール前で数的優位を作り出すことは至難の業であったに違いない。

こうした事情に変化が生じる契機は、昭和 8（1933）年 1 月に神宮外苑相

(69) 早稲田大学 RDR 倶楽部編『RDR60—早稲田大学バスケットボール部 60 年史—』早稲田大学 RDR 倶楽部、1983 年、27 頁。一球会編『一球会史—籠球部六十周年記念—』一球会、1985 年、241 頁。東京海上バスケットボール部記念誌編集委員会編『TOKIO MARINE BASKETBALL』東京海上バスケットボール部記念誌編集委員会、1992 年、24 頁。明治大学バスケットボール部 OB 会編『明治大学体育会バスケットボール部 70 年史』明治大学バスケットボール部 OB 会、1995 年、89 頁。

なお、東京 YMCA の体育館は主要な全国大会のみならず、その地区予選の会場としても使用されていたことが、昭和初期の大会プログラムの記載内容から知ることができる（大日本體育協會主催『第九回極東選手権競技大會 女子籠球エキジビション競技 全日本第二豫選（関東地方）籠球競技プログラム』昭和 5 年 4 月 26～27 日開催。大日本バスケットボール協會主催『全日本男子籠球選手権競技 東京府豫選』昭和 6 年 1 月 24 日～25 日開催、など）。

(70) 李想白「籠球界を顧みて」『昭和七年 運動年鑑』朝日新聞社、1932 年、237～238 頁。

(71) 日本バスケットボール協會編『バスケットボール指導教本』大修館書店、2002 年、220 頁。

撲場に組立式のバスケットボールコートが完成したことに求められる。このコートは縦に30m、横に18mの面積を占め、ここに80枚に分割した板畳を敷き詰めた板張りのコートであった⁽⁷²⁾。以来、神宮外苑コートは国民体育館が使用されるようになる昭和12(1937)年までの間、全日本選手権大会の会場として使用されている⁽⁷³⁾。

神宮外苑コートは、従来の試合会場であった東京YMCAや明治大学のコートよりも広い競技空間が確保されていた。このコートが試合会場として使われはじめた頃に雑誌『籠球』誌上で催された座談会で、参加者の1人であった土肥一雄はコートの拡大に伴うある種の戸惑いを次のように語っている⁽⁷⁴⁾。

「コートが大きくなったんで戦法の内の一つの技術にも変化が来たことは事実ですがそれが爲にこれ迄もよく言つて来たんですが、狭いコートでやつて居ると本當いふとおかしいけれども、ディフェンスの仕方でも正しいとされた方法を用みなくても、例へば一間(約1.8m—引用者注)位離しても自分の後へ敵を入れて居つても、それからボールを持たしてからガードをしに行つても間に合つて居た。それが廣い所へ行くとそういふやり方では行かないでせう。それ等が曝露されてしまつた。」

土肥の発言から、コート面積の拡大は防御すべき空間の拡大をも意味していたため、防御側にとっては不利に働いていた様子を汲み取ることができる⁽⁷⁵⁾。これを換言すれば、攻撃側はより広い空間を利用して攻撃を展開することが可能になったため、防御側の帰陣に先立って速攻法を試行することが容易になっ

(72) 明治神宮奉賛会編『明治神宮外苑志』明治神宮奉賛会、1937年、175～176頁。

(73) 朝日新聞社編『昭和八～十二年度運動年鑑』朝日新聞社、1933～37年。

(74) 土肥一雄ほか「座談会 競技会の近情を語る」『籠球』9輯、1934年3月、50～51頁。

(75) 同じ座談会の席で大村泰三が「今迄のコートではセンターから二つか三つドリブルすると、もうシュートといふ、こんな状態ではオフENSの場合も勿論、ディフェンスを考へる餘地もなく…」と振り返っているように、従来はかなり狭いコートで公式戦が実施されていたとみえる(土肥一雄ほか「座談会 競技会の近情を語る」『籠球』9輯、1934年3月、49頁)。

たと考えられよう。

以上の検討によれば、昭和初期の日本においては技術的な問題、ルール上の問題、競技空間の問題が影響して、これが速攻法の使用を妨げていたといわねばならない。この他にも、バスケットボールの技術・戦術が味方の対応や相手との対峙などとの相互関係のうえに成立するという視座に立脚するならば⁽⁷⁶⁾、例えば当時代における防御戦術の歴史を紐解いて速攻法との関係性を追求する必要が生じるが、これは今後の課題として位置づけておきたい。

4. おわりに

本稿における検討の結果は、以下のように整理することができる。

1. 昭和初期の日本で説かれていた主要な速攻法には、長距離送球法（ロングパス・ファストブレイク）と三路攻撃法（スリーメン・ファストブレイク）の 2 種類があった。長距離送球法はリバウンドボール獲得後、フロントコートのゴール付近に常駐している 1 人の選手にロングパスを送るものであったため、当時最速の攻撃戦術であると考えられていたが、その分 4 人での防御を余儀なくされることに欠点があった。一方、三路攻撃法は 5 人で防御するものであったが、ドリブルを交えてボール運びをするために長距離送球法よりも速度の面では劣っていた。いずれの速攻法も、ゴール前で防御側に対して数的優位を作り出す工夫が施された戦術であった。
2. 昭和初期の攻撃戦術は、オールコートでのスピーディな展開を志向する「速攻法」ではなく、ボールの獲得後は 5 人揃った状態でゆっくりとパスを回しながらハーフコートでスローテンポな攻撃を展開する「遅攻法」が全盛であった。当時は速攻法の利点が十分に認識されていたものの、少な

(76) 岸野は、運動学各論（＝特殊運動学）を論じるにあたってバスケットボールを「集団的運動学」に分類し、そのチーム・ゲームとしての特徴を「相手との相互関係において成立する」ところにみている（岸野雄三「運動学の対象と研究領域」『序説運動学』大修館書店、1968年、22～23頁）。

くとも技術的な問題、ルール上の問題、競技空間の問題が影響して、この攻撃戦術は実際の試合で使用されることは稀であった。

—たにがま ひろのり・法学部専任講師—